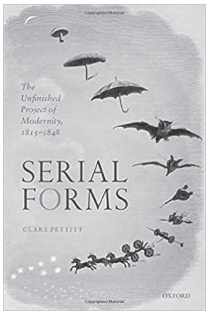
書　評



Clare Pettitt. *Serial Forms: The Unfinished Project of Modernity, 1815-1848*
（Oxford: Oxford University Press, 2020）

玉井　史絵

Serial Forms というタイトルから、てっきり19世紀小説の連載形式についての研究書かと思ってページを開いた。しかしながら、そんな予想に反し、本書はシリアルという概念そのものを軸にヴィクトリア朝文化・社会を論じる刺激に満ち溢れた研究書であった。クレア・ペティットはシリアルが現代を特徴づける決定的な要素であるという。それは連続する全体のなかに個を位置づけ、識別し、ある一定の規則的リズムを個人の生活や社会全体に刻んでいくことを可能とする形式であり、ジャンル、システム、テクノロジーである。また、戦略とも哲学ともなりうる。シリアルは、たとえば奴隷制度下のアメリカやアウシュビッツ強制収容所での個人識別のための焼き印のような、究極の非人間性をもって出現することもあるが、同時に革命的な変革の可能性も秘めた開放的な装置にもなる。ペティットは1815年から第1次世界大戦終結の1918年までを射程に入れつつ、イギリス、とりわけロンドンに焦点をあてて、シリアルの出現とそれが人々の想像力に与えたインパクトを解明しようとする壮大な三部作の研究を展開する。その第一部である本書では、19世紀前半のイギリスの文化と社会に焦点をあてて、シリアルがいかにして形作られ、それが歴史や社会に対する人々の認識にどのような影響を与えたのかを、いくつかの鍵となる作家・作品とともに論じていく。

ペティットによれば、連続する時間の概念は徐々に形成され、19世紀半ばに確立したという。人々はシリアルをとおして、連続し秩序だった時間軸のなかでの現在という時間を理解するようになっていったのである。しかしながら、シリアルは同時に融通無碍な形態でもあり、その発展は決し

て直線的ではない。一つのシリアルが他のシリアルと融合したり、また、離れたりして複雑で不均衡なネットワークとパターンを生み出していく。そのダイナミックなプロセスをペティットは、文学研究だけではなく歴史学、社会学、政治学の知見を結集させて検証していく。

ペティットの分析手法の特徴を二つ上げる。第一に、作家や作品は単独で存在するのではなく、様々なメディアを通して社会と繋がり、反応し、創造する存在として捉えられ、社会と作家、作品との双方向的な関係が重視されている。これは新歴史主義批評の流れから考えると必ずしも新しい方法ではないと思われるかもしれないが、本書の特徴として、そもそも「作品」という概念自体が解体されている点が新しい。「作品」とは我々が現在手にする完成形ではなく、紙媒体や劇場を含む多彩なメディアから借用され、またそうしたメディアによって改変される動的で変化自在な形として理解されるのである。これに関連して、第二の特徴として、作品が必ずしも二次元の読まれるだけの媒体ではなく、読者によって創造的に所有され、改変されうる三次元の「モノ」であるという観点から、作品の受容を検討している点が挙げられる。作品は完成形として「読まれた」だけではなく、安価な雑誌に一部だけが掲載されたり、舞台で上演されたり、歌になったりするなど、人々の生活に密着した形で消費された。あらゆる階層の人々が能動的に作品の受容と新たな創造に携わったのである。こうした多様な文学受容と創造のあり方を本書は豊富な図版と共に紹介していて、まるでヴィクトリア朝ロンドンの喧騒が聞こえてくるような臨場感を感じさせてくれる。このような手法を通して、過去の出来事が現在と交錯しつつ人々に共有され、次第に連続した歴史の概念が生まれていく過程や、その過程のなかで、徐々に人民を「人口」として数え可視化するシリアルの概念が生政治と結びついていく状況をペティットは丹念に解明していく。

第1章「昨日のニュース」では、1820年代から30年代にかけてのメディアの状況が概観される。この時代は、アルマナック、バラッド、ブロードシート、ミセラニーなどの古い形態のメディアと、新しく発刊された新聞や雑誌などの新しい形態のメディアが、互いに競い合うようにニュースを渇望する人々の欲求に応えた。ベネディクト・アンダーソンのいう「空虚で均質的な時間」は未だ存在せず、過去と現在が交錯する時間軸のなかで多彩

なメディアがそれぞれに時間のリズムを刻みながら共存していたのである。

第2章「解き放たれたスコット」では、スコットの小説の需要を完成した「本」という形態から解き放ち、他の形態へと変幻自在に改変可能なマルチメディアの現象として再評価する。スコットはバラッドやブロードサイドなどの大衆出版物から語りのモデルを見出して創作し、その作品は再び多様なメディアへと変換されてあらゆる階層の人々に消費された。スコットの作品は初めから断片的であったからこそ、人々は自由に断片を組み合わせてアルバムにするなど、創造的に作品を楽しむこともできた。こうした柔軟かつ複雑な受容を可能とするシリアルという形態が生み出した現象こそが、スコットであった。

第3章「ライブ・バイロン」では、過去を生き生きと再現しようとするショーやスペクタクルの最前線にバイロンを位置づけ、難破のモチーフを軸にバイロンの『ドン・ジュアン』とフランスの画家ジェリコーの「メドゥーサ号の筏」を検証する。『ドン・ジュアン』の難破のシーンは、同時期にエジプシャン・ホールに展示されたジェリコーの絵画と関連付けて批評され、その生々しい肉体表現が大きな反響を巻き起こした。彼らの作品はライブショーのように読者の身体的感覚に訴えバーチャルリアリティーへと誘うものであり、読者に日常を越えた世界を想像させ、新しい歴史意識を芽生えさせる一助となった。

第4章「ストランドのヴェスヴィオ火山」では、当時のメディアにおけるヴェスヴィオ火山の噴火の表象とエドワード・リットン・ブルワーの『ポンペイ最後の日々』が取り上げられる。古代から19世紀に至るまで幾度となく噴火を繰り返したヴェスヴィオ火山は、メディアにとっては格好のスペクタクルであり、人々はその表象を通じて歴史の反復性と連続性の感覚を学んでいった。火山の噴火は革命のイメージとも結びつき、ヴェスヴィオ火山は革命の連続性の比喩としても機能した。ブルワーの『ポンペイ最後の日々』は大惨事が起こる直前の人々の日常を描いたが、それは「日」という時間が資本主義に組み込まれつつある時代における連続性の創造でもあった。

第5章「尺度――ピュジン、カーライル、ディケンズ」では、時間、空間の両方において、物事や出来事の相対的距離を測る「尺度」の観点から3人

を論じる。3人はそれぞれが異なるジャンルで尺度を操作することによって、民主主義、資本主義への不安や改革への野心を表現した。ピュジンとカーライルは共に過去と現在を対比し、過去が人間的尺度を維持しているのに対して、現在は均衡を失い怪物のように巨大で膨張した時代であると批判した。これら二人が民主主義や過剰な消費文化に対する不安や嫌悪を表す一方、ディケンズは『ボズのスケッチ集』で、拡大するロンドンの「小さな」庶民たちの生活を連載の対象として描くことで、彼らも構成員として参加する新しい政治的可能性を示唆した。

第6章「ミニチュアの歴史」では、引き続き時間と空間の尺度について考察する。ヴィクトリア時代、人々は様々なミニチュアや連載の印刷物によって歴史的建造物や歴史的出来事を見たり、読んだり、体験したりすることができた。こうした経験を通じて、彼らはより大きな社会ネットワークに属しているという感覚を身につけ、自らを長い歴史時間のなかに位置づけることができるようになっていく。人々の歴史感覚は、モノを通じた体験のなかで培われていったのである。

第7章「連載の生政治」では、『ハウィッツ・ジャーナル』を取り上げ、人道的感情に訴えて不正を正し改革を進めようとした進歩的ジャーナルが、同時にいかにシリアルの特徴である反復によって、期せずして「人口」を統制する生政治とも密接に関わっていたかを、アイルランド飢饉の表象を例に取り上げて論じる。飢饉の惨状を読者に伝え改革を訴えるジャーナルは同時に、アイルランドの人々を十分に文明化されていない「人種」とする言説に無意識的に加担していた。そして、その影響は大西洋を越えて、解放奴隷のフレデリック・ダグラスが創刊した新聞『ノース・スター』にも及ぶことになる。

本書はヨーロッパに革命の連鎖現象が起きる1848年前夜で終わっている。革命を可能としたのは、メディアによってもたらされた国際的相互関係の新しい意識の共有であったとペティットは結論付ける。アンダーソンは、ネイションが「太古の過去」から「無限の未来」へと進む共同体として表現されると論じたが、本書はそのような共同体の根幹を成す連続の意識が形成されていく過程を、膨大な資料に基づいて解き明かす。作家やジャーナリストといったメディアの送り手ばかりではなく、名もなき受け手の人々

の存在をペティットは常に意識し、「歴史」が双方のインタラクティブな関係の中でしか生まれ得ないことを強調する。バラッドやブロードシートをノベルティのように大切にする人々、雑誌の切り抜きをアルバムにして、自分だけの本を作る人々、ピープショーやパノラマを見て遠い過去や、遠い場所の出来事に思いを馳せる人々――こうした人々の息遣いが、カノンの作家以上の存在感を持って、本書を彩っている。「続く」*Serial Revolution* と *Serial Transmission: Literature and Other Technologies 1848-1918* の出版が待ち遠しい。本三部作が完結した暁には間違いなくヴィクトリア朝研究におけるランドマークとなるような大著となるであろう。

―同志社大学教授